

## ≪講演で扱われる主な神学者たちのリスト(年代順)≫

### フィリップ・メランヒトン Philip Melancthon (1497-1560)

メランヒトンは、ドイツの人文主義者であり神学者で、ルターの親しい協力者でもあった。ヴィッテンベルク大学でギリシャ語および神学の教授を務めた。主な著作には、『ロキ・コムネス』(プロテスタント初の主要な組織神学書)や『アウクスブルク信仰告白』がある。彼は主にルター派に属していたが、教育、倫理、そして和解的なアプローチを重視する人文主義的な姿勢を通じて、改革派の思想にも影響を与えた。

### ピーター・マーテル・ヴァーミグリ Peter Martyr Vermigli (1499-1562)

ヴェルミグリはイタリア生まれの改革派神学者であり、プロテスタントのヨーロッパへ逃れた。ストラスブールで神学教授(1542年~1547年および1553年~1556年)、オックスフォード大学で神学王座教授(1547年~1553年)、そしてチューリッヒで教授(1556年以降)を務めた。主な著作には、死後に編纂された『ロキ・コムネス』や聖書註解書(特に『ローマ人への手紙』および『コリント人への第一の手紙』に関するもの)がある。彼は、改革派の聖礼典論および聖書解釈の初期の形成者としての役割を果たし、大陸および英国のプロテスタント主義の両方に影響を与えた点で、改革派神学において重要な人物である。

### ジョン・カルヴァン John Calvin (1509-1564)

カルヴァンは、フランスの改革派神学者であり、改革者であり、ジュネーブにおいて(主に1541年以降)牧師、講師、そして教会の指導者として活動した。彼の代表作が『キリスト教綱要』(初版1536年、後に大幅に増補)であり、また膨大な聖書註解書も著した。彼は改革派神学の基礎を築いた人物である。

### ランバール・ダノー Lambert Daneau (c. 1530-1595)

ダノーはフランスの改革派神学者であり、フランスの教会で牧師を務めた後、1576年からジュネーブ神学校の神学教授に就任し、その後ライデンやその他の地でも教鞭を執った。主な著作には『キリスト教入門(Christianae Isagoges)』のほか、倫理学や自然哲学に関する論考がある。彼は、スコラ哲学の手法を改革派神学に取り入れ、哲学と改革派の教義を統合した点で、改革派神学において重要な人物である。

### ザッカリウス・ウルジヌス Zacharias Ursinus (1534-1583)

ウルジヌスは、メランヒトンに師事したドイツの改革派神学者であり、ハイデルベルク大学の神学教授を務めた。『ハイデルベルク信仰問答』(1563年)の主要な執筆者であり、同書に関する主要な註解書も著した。彼は、プファルツ地方において重要な信仰告白の基準を確立し、改革派教会や教育の場で広く用いられる、明確かつ牧会的かつ教理的な解説を提供した点で、改革派神学において重要な人物である。

## アントワーヌ・ド・シャンディュー Antoine de Chandieu (1534-1591)

フランスの貴族であり、改革派神学者であるシャンディュー(アントワーヌ・ド・ラ・ロッシュ・シャンディュー)は、パリの改革派教会の牧師を務め(1557-1562年、迫害により中断あり)、その後、ローザンヌおよびジュネーブのアカデミーで神学を教えた。彼は『教会規律の確認』(1566年)などのスコラ的論著や詩作を残した。改革派神学において、彼は改革派スコラ的方法の初期の確立者の一人であり、宗教戦争期におけるフランス・プロテスタント教会の教会政治と抵抗運動の主要な組織者として重要な位置を占めている。

## オットー・カスマン Otto Casmann (1562-1607)

スマンは、シュターデのギムナジウムの校長を務めたドイツの改革派哲学者・神学者である。彼は人間学、心理学、自然哲学に関する著作を残した。哲学史において、彼が重要視されるのは、改革派の枠組みの中で、初期のプロテスタントが形而上学および心理学的思考に果たした貢献を体現している点にある。

## ジョン・ダヴェナント John Davenant (1572-1641)

ダヴェナントは、イングランドの改革派神学者であり、ケンブリッジ大学でレディ・マーガレット神学教授(1609年頃より)、同大学クイーンズ・カレッジの学長を務め、後にソールズベリー司教(1621年)に就任した。彼はドルト教会会議(1618年~1619年)においてイングランドの代表を務めた。主な著作には、義認や贖罪の範囲に関する論考がある。彼は穏健なカルヴァン主義者(仮説的普遍主義者)として、イングランド国教会内における英国改革派思想を形成した人物であり、改革派神学において重要な位置を占めている。

## ジョン・ウィームス John Weemes (c. 1579-1636)

ウィームス(またはウエミス)は、スコットランドの改革派神学者であり、スコットランドの教区で牧師を務めた人物である。彼は聖書解釈、モーセの律法、そしてユダヤ教の学問をキリスト教に応用することに重点を置いた。主な著作には『キリスト教のシナゴグ』や『旧約聖書の律法に関する研究』がある。彼はラビ学とプロテスタント神学を融合させることで、英国における改革派の聖書解釈学の発展に貢献した。

## マーカス・フリードリヒ・ウェンデルリン Marcus Friedrich Wendelin (1584-1652)

ウェンデルリンは、ドイツの改革派神学者・哲学者であり、ドイツ国内(特にツェルプスト)の改革派アカデミーやギムナジウムで学長および教授を務めた。彼は体系神学の著作を著した。主な著作に『キリスト教神学二巻(Christianae Theologiae Libri Duo)』がある。彼は神学と哲学教育を融合させることで、ドイツ諸地域における改革派スコラ哲学の発展に貢献した。

## ヤコブ・レヴィウス Jacob Revius (1586–1658)

レヴィウスは、オランダ改革派の神学者、詩人、学者であり、ライデン大学のスタテン・カレッジの学長を務め、教会活動にも携わった。彼は詩や神学論著を執筆し、その中にはデカルト哲学に対する批判も含まれていた。彼は正統派の立場を支持しつつ、特定の哲学的革新に対する初期の反対者として、オランダ改革派の知的活動に貢献した。

## ギズベルト・フォエティウス Gisbert Voetius (1589–1676)

フォエティウスは、オランダ改革派の代表的な神学者であり、ハウスデンとフリイメンで牧師を務めた後、1634年からユトレヒト大学の神学および東方言語学の教授に就任し、同大学で牧会指導も行っていった。主な著作に『教会政治論 (Politica Ecclesiastica)』や『神学論争選集 (Selectae Disputationes Theologicae)』がある。彼はドルト教会会議以降、アルミニウス主義、デカルト主義、コッケウス主義に反対し、厳格なカルヴァン主義正統派(フォエティウス主義)の主要な擁護者として、改革派神学において重要な位置を占めている。

## アブラハム・ハイダヌス Abraham Heidanus (1597–1678)

ハイダヌス(またはヘイダヌス)は、フランケンタール(プファルツ)生まれのオランダのカルヴァン派神学者であり、ライデンで牧師(1627年より)を務め、ライデン大学の神学教授(1648年から1676年に解任されるまで)を務めた。彼は神学におけるデカルト哲学の強力な提唱者であった。主な著作には、『Considerationes (学問の自由を擁護する)』や、死後出版された『Corpus Theologiae Christianae (キリスト教神学全集)』(1686年)がある。彼は、17世紀のライデン論争において、改革派の圏内で哲学的な開放性とデカルト思想を推進したことで知られる。

## サミュエル・マレシウス Samuel Maresius (1599–1673)

マシウス(デスマレ)はフランス生まれの改革派神学者であり、1642年からフローニンゲン大学の神学教授を務めたほか、それ以前にはセダンなどで教鞭をとっていた。彼はカトリック教徒やアルミニウス派などに対する論争的な著作を数多く執筆した。フランスやオランダ各地の学術界や論争の場で、改革派の正統性を力強く擁護したことで知られている。

## アドリアン・ヘーレボード Adriaan Heereboord (1613–1661)

ヘーレボードは、ライデンで生まれ、同地で活動したオランダの哲学者兼論理学者である。ライデン大学で論理学の講師(1640年より)を務め、その後、哲学教授(1644年より倫理学の講座を担当)となった。主な著作に『Collegium ethicum』(1648年)や『Meletemata philosophica』(1654年)がある。彼は、オランダ改革派の学界においてデカルトの思想を導入し、議論を交わした点で哲学史において重要な人物であり、大学内の論争を乗り越えつつ、それらをアリストテレス派やスコラ哲学の伝統と融合させた。

## ヘンリー・モア Henry More (1614-1687)

モアはイギリスの哲学者・神学者であり、ケンブリッジ・プラトニズムの主要な人物の一人として、ケンブリッジ大学クライスト・カレッジのフェローを務めた。英国国教会派であったが、その著作はプロテスタント思想にも広く言及している。主な著作に『研而上学要綱(Enchiridion Metaphysicum)』や『魂の不死(The Immortality of the Soul)』がある。彼は、機械論的唯物論に対する理性的かつ精神を肯定する批判を展開し、神学と近世科学との架け橋となった点で、哲学史において重要な位置を占めている。

## リチャード・バクスター Richard Baxter (1615-1691)

バクスターは、イギリスの清教徒の牧師であり、キダーミンスター教会で牧師を務め(1641年～1660年、中断あり)、徹底的な牧会改革を推進した。主な著作に『聖徒の永遠の安息』や『改革された牧師』がある。すべての点において厳格な信仰告白的立場をとっていたわけではないが、その実践的な神学、一致と聖潔への強調、そしてイギリスのプロテスタント牧会神学への影響という点で、重要な人物である。

## ヨハネス・デ・ライ Johannes de Raey (1622-1702)

デ・ライは、オランダのデカルト派哲学者であり医師で、ライデン大学、のちにアムステルダム大学で哲学教授を務めた。彼はデカルトの方法論と伝統的な学問を統合しようと試みた。主な著作に『自然哲学の鍵(Clavis philosophiae naturalis)』がある。オランダの大学においてデカルト主義を広めつつ、それを改革派の学術的文脈と調和させようとした点で、哲学史において重要な人物である。

## フランシス・トゥレティン Francis Turretin (1623-1687)

トゥレティン(フランソワ・トゥレットニー)は、ジュネーブ出身のイタリア系改革派スコラ神学者であり、ジュネーブのイタリア人教会(1648年より)およびフランス人会衆(1653年より)の牧師を務め、またジュネーブ神学アカデミー(1653年より)の神学教授を務めた。彼の主要な著作は、全3巻からなる『弁証神学要綱』(Institutio Theologiae Elencticae, 1679-1685)である。彼は改革派神学の中心的人物として位置づけられており、アルミニウス主義、アミラルド主義、その他の異論に対してカルヴァン主義の教義を体系的に擁護することで、改革派の正統性を体現した。

## クリストファー・ヴィッティヒ Christopher Wittich (1625-1687)

ヴィッティヒは、ブリエグ(シレジア)生まれのオランダ改革派の神学者であり、デカルト派の哲学者であった。ヘルボルン・アカデミーで神学、数学、ヘブライ語の教授を務め(1651年～1653年)、ナイメーヘンで教鞭を執り(1655年以降)、ライデン大学の神学教授に就任した(1671年以降)。主な著作には『平和の神学(Theologia pacifica)』やデカルトの『省察』への注解がある。彼の意義は、デカルト哲学を改革派神学および聖書と調和させた点にあり、スピノザに対する初期の批判を含め、オランダの哲学・神学論争に貢献した。

## フランス・バーマン Frans Burman (1628–1679)

バーマンはコックエイウスの影響を受けたオランダ改革派の神学者であり、ハノー(ドイツ、1650年より)で牧師を務め、ライデンのスタテン・カレッジで副学部長(1661年より)、ユトレヒト大学で神学教授(1662年より)を歴任した。彼の主要な著作が『神学要綱(Synopsis Theologiae)』である。彼は、オランダの学術的文脈において、契約神学とデカルト思想への穏健な関与を通じて、改革派神学に貢献した。

## ペトラス・ファン・マストリヒト Petrus van Mastricht (1630–1706)

ファン・マストリヒトは、ユトレヒト大学で神学教授を務めた(1677年より)オランダ改革派の神学者である。彼の代表作は、教義と実践的な信仰を統合した包括的な著作『Theoretico-practica Theologia(理論実践神学)』である。彼は、論争的でありながらも牧会的である体系的なアプローチで知られる、改革派神学における主要な正統派の指導者として重要な位置を占めている。

## トーマス・バーネット Thomas Burnet (c. 1635–1715)

バーネットは、ロンドンのチャーターハウス修道院の院長を務めたイギリスの神学者兼宇宙論者である。彼の代表的な著作は『地球の神聖な理論』である。彼は英国国教会派であったが、神学と自然哲学を思惑的に統合したその試みは、改革派の関心事である摂理や創造といったテーマにも触れていた。また、聖書の記述と新興の地質学とを調和させようとした近世初期の試みという点で、哲学および科学史において重要な位置を占めている。

## ウルリク・フーバー Ulrik Huber (1636–1694)

フーバーは、改革派の背景を持つオランダの法学者・法哲学者であり、フラネカー大学で法学および関連分野の教授を務めた。彼は自然法、政治学、法学に関する著作を残した。哲学史において、彼の重要性は、オランダの学術的伝統におけるプロテスタントの自然法理論への貢献にある。

## ヘルマン・ウィツィウス Herman Witsius (1636–1708)

ウィツィウスはオランダ改革派の神学者であり、オランダの複数の教会で牧師を務めたほか、フラネケル、ユトレヒト、ライデンの各大学で神学教授を歴任した。彼の代表作は『神と人との間の契約の経済(De Oeconomia Foederum Dei cum Hominibus)』である。彼は、連邦(契約)神学においてフォエティウス派とコックエイウス派の主張を統合し、教義と体験的な敬虔とのバランスを図った点で、改革派神学において重要な位置を占めている。

## ジョン・エドワーズ John Edwards (1637–1716)

エドワーズは、イングランドで牧師および学者の職を務めた、英国のカルヴァン主義神学者であり聖職者であった。彼は、アルミニウス主義や寛容主義の潮流に対して、厳格なカルヴァン主義を擁護する数多くの論争的な著作を著した。そ

の著作には、改革派の教義を擁護する多巻にわたる論考が含まれている。彼は、啓蒙主義の影響が高まりつつあった17世紀後半から18世紀初頭のイングランドにおいて、正統的なカルヴァン主義を擁護したことで知られている。

### サロモン・ヴァン・ティル Salomon Van Til (1643-1713)

ヴァン・ティルは、ユトレヒト大学およびライデン大学で神学教授を務めたオランダ改革派の神学者である。彼は、契約論と実践神学に重点を置いた註解書や体系的な神学書を著した。彼の重要性は、哲学的変遷のさなかにあった17世紀末から18世紀初頭のオランダ改革派神学における位置づけにある。

### ジェラルダス・デ・フリース Gerardus de Vries (1648-1705)

デ・フリースは、ユトレヒト大学の哲学・神学教授を務めたオランダ改革派の哲学者兼神学者である。彼は改革派の枠組みに留まりつつ、急進的なデカルト主義やスピノザ主義を批判した。その著作は主に形而上学および神学に関する論争から成っている。17世紀後半のオランダの大学における論争において、彼がとった穏健な姿勢は、哲学史において重要な位置を占めている。

### ヘルマン・アレキサンダー・レーエル Hermann Alexander Röell (1653-1718)

レーエルは、デカルト主義の影響を受けたオランダ改革派の哲学者・神学者であり、ユトレヒト大学、のちにフラネケル大学で教授を務めた。神学における彼の合理主義的な見解は論争を巻き起こした。著作には哲学的・神学的な論考が含まれる。彼は、17世紀後半のオランダの大学における「理性」と「啓示」をめぐる論争において果たした役割により、哲学史および改革派思想史において重要な位置を占めている。

### ギズベルト・ウェッセル・ドゥーカー Gisbert Wessel Duker (1666-1736)

ドゥーカーは、18世紀初頭に活躍したオランダ改革派の神学者であり、オランダの学術界および教会界(特にユトレヒトの学界)において正統派の伝統を継承した。彼は、知的潮流が移り変わる中で、スコラの改革派神学を擁護した。その意義は、オランダ共和国のフォエティウス以後の時代に、厳格な正統性を守り抜いた点にある。

### ジャン・アフフオンス・トゥレティン Jean-Alphonse Turretin (1671-1737)

ジャン＝アルフオンス・トゥレタン(フランシス・トゥレタンの息子)は、ジュネーブ・アカデミーで神学教授を務め、牧師も務めたジュネーブの改革派神学者である。彼は、父の厳格なスコラ主義よりも、啓蒙主義の影響を受けたより穏健なアプローチを採用した。彼の著作には、父の伝統を受け継ぎつつ、より理性を重視した神学論考が含まれている。彼の意義は、ジュネーブにおいて、厳格な改革派正統主義から18世紀の合理主義的プロテスタント主義への移行を画した点にある。